


 書評

James Morrison 原著, 高橋祥友 監訳, 高橋 晶, 袖山紀子 訳
モリソン先生の精神科診断講座
 Diagnosis Made Easier

石丸昌彦

掛け値なしに面白く、しかもためになる本というのはそう多くないが、本書はそのまれな一冊であること請け合いである。自分の志した精神医学は、このように豊かで魅力的であったのだと思ひ出させてくれる。

多言を弄することによってかえって薄っぺらく見せてしまうのは本意ではないが、あえて言語化するなら以下のようなことである。

本書は三部構成で、順に「診断の基礎」「診断の構成要素」「診断技法の適用」から成る。

第Ⅰ部「診断の基礎」は、臨床的思考の筋道を丹念に示す。症状・兆候・症候論といった基礎概念が明確な定義とともに順次導入され、ディシジョンツリーへと組み立てられていく。同時に「兆候は症状に勝る」「直観に頼るといふ誘惑に負けてはならない」といった金言・箴言が次々と示され、それらがページごとにふんだんに提示される症例にことよせて解説されることで、生き生き躍動しながら頭に入ってくる。方法論的基礎を叩き込む第Ⅰ部である。

第Ⅱ部「診断の構成要素」は原題が“building blocks”とある通り、生育歴・家族歴・身体疾患・精神機能評価といった情報のブロックから、いかに患者の全体像を再構成するかを論じる。そのような内容ゆえに症例はアメリカ社会の諸相を広く点描し、読み物としても相当に豊かなものになっている。イメージを立体化する第Ⅱ部である。

第Ⅲ部「診断技法の適用」は全体のほぼ 6 割を占め、Ⅰ・Ⅱ部で提示された思考法のおびただしい実践例が紙面を埋めている。豊穡の第Ⅲ部である。

意外外の指摘もあれば同感共鳴する主張もありで、大部ながら飽きることがない。例えば DSM で

見かけ上齊一化された「うつ病」に実際は多くの原因があることを喝破し、その鑑別診断について説き進める 11 章などは圧巻で、臨床知とはこういうものかと感嘆する。強いて難を言うなら内容が豊かすぎることで、十分消化して批判的に検討することができるまでには、二読三読を要するであろう。

教科書作りを得意とするアメリカ人の本領発揮の一冊であるが、むろん翻訳者らの貢献が大きい。格調を保ちつつこねた日本語に落とし込んだ力量は見事であり、英語のみならずアメリカ文化に通じた人々の労作であることがうかがわれる。

一点だけ、13 章で disorganized をことさら「解体された」と受け身に訳しているが、では解体した犯人は誰(何)かと妙な方向に連想を動かす点でかえって拙くないだろうか。それよりも、以前から「解体」の語に疑問があった。disorganized は「ちぐはぐ」「てんでんばらばら」というほどの意味であり、ビルや自動車の粉砕のごとき「解体」は明らかに不適切で、患者への配慮をも欠いている。どうせこの語に注目するなら、せつかくの機会に訳者らの手で別の語を編み出してほしかったと、ファンの心理でお伝えしておく。

監訳者があとがきで述べている通り、姉妹編『精神科初回面接』(医学書院, 2015 年)と合わせてじっくり読み込むことを全ての精神科医に勧めたい。DSM の副作用を予防するためにも一押しの好著である。

(放送大学教授・生活と福祉コース)

●B5 288 頁 2016 年 4 月 定価: 本体 4,500 円+税 医学書院刊